科研身心変容技法の比較宗教学～心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」2014年度研究計画2014年4月24日

１、津城寛文

①憑依技法を再考してみる――ジェイムズの心霊研究その他

ジェイムズの心霊研究の中に、パイパー夫人を霊媒とするまとまった記録がある。比較的よく知られた研究であるが、管見の限り、宗教研究、文化人類学の大きなテーマである憑霊との関連で、参照される例は目につかない。理由の１つは、心霊研究の学術世界における地位の不安定さ、あやふやさ、怪しさにあると思われるが、シャーマニズム研究に心霊研究が有益であるだろうことは、１９５０年代の民族学者や宗教学者が期待し、予感するところだった。

５月の研究会で、心霊研究圏におけるジェイムズについて、発表することになっている。また９月の宗教学会では、本科研のパネルがあって、もし私が参加するとなれば、神道系の行法を材料とすることになる。そこで、これらの発表（確定＋未定）を想定して、ジェイムズの心霊研究から、大本系その他の憑依技法・儀礼にアプローチしてみる。その他のアプローチと並べたとき、どのような特徴があるのか、考えてみたい。

　これらを整理して、年（度）末に、最終報告書の原稿をまとめてみる。

参考文献

William James, “Report on Mrs. Piper’s Hodgson-Control”, 1909, in Gardner Murphy and Robert O. Ballou eds., *William James on Psychical Research,* Augustus M. Kelly・Publishers, Clifton, New Jersey, 1973,　etc.

1. 井上ウィマラ
2. 脳波の測定からｆＭＲＩの測定に：　ＦＡ，ＯＭ，慈悲瞑想の違い
3. 自我意識の成立に必要な単位時間について：　瞑想体験、スターンの『プレゼントモーメント』、マーロックの*Communicative Musicality*などを参考に考察。
4. パーリ文献における解脱に関する定型句の分析。
5. 患者の安心感を支える臨床におけるメタ認知の重要性について：　精神科医神田橋條治氏の臨床場面における陪席調査、神谷整子助産師へのインタビューなどを中心に。
6. 棚次正和

①**「心身問題と魂の死後存続」についての考察**

ベルクソンの著書『物質と記憶』や論文集『精神的エネルギー』『思考と動くもの』、また哲学者カール・ポパーと神経生理学者ジョン・エクルズとの共著『自我と脳』などを参考にして、心身問題や心と脳の関係について考えてみたい。この考察を通して予想されることは、心身二元論から霊心身三元論（人性三分説）へと人間観が根本的な転換を遂げるだろうということである。それは人間自身の自己理解が大きな変容を被るということを意味する。人間は死すべき存在であると見る人間観と、不死なる永遠の存在であると見る人間観との間には、実に大きな乖離があるが、この乖離を現実の認識上で架橋しうる視力を養成することが求められていると考えている。

②**新たな医学哲学の基本的視座を構築すること**

現在の主流医学やそれに基づく医療において暗黙裡に前提され、またそれゆえに自覚的に検討されることも少ない生命観や人間観を問い直し、そこに含まれた問題点を照らし出しながら、全人的な「医学哲学」を再構築するための予備的考察を行なってみたい。新たな医学哲学の基本的視座に据えられるのは、対象分析的に観察・実験と説明を試みる三人称の自然科学の視点と、一人称の主観的な体験過程として自覚される霊性を人間存在のコアに持つ人間学の視点とが統合したものであろう。この三人称の科学と一人称の霊性が出会う接点として、祈りや瞑想が医療現場の中から注目されるはずである。

1. 町田宗鳳

『トリックスター・一休の風狂的世界』

　一休禅師は、室町幕府の権力構造の中に完全に吸収された禅宗界に対して強烈な批判精神を抱いていたが、それを単なるエスプリとしてではなく、風狂という一種の身体技法によって、余すところなく体現した。室町期には「バサラ」という権威を否定する社会風潮があり、それが武家社会における下剋上を生み出したのであるが、一休も明らかに既存の宗教的権威に対する「バサラ」的存在であり、中世日本における最大のトリックスターでもあった。

　南北朝統一直後に、北朝の後小松天皇と南朝系の側室の間に生を授かった瞬間から、彼は幾重にも錯綜する運命を背負うことになったが、幼少期に受けた深刻なトラウマが、彼の求道心の原動力となっていることは間違いない。

しかし青春期の真剣な禅修行とは打って変わり、４０歳以降の一休の振る舞いは、傍若無人の狂気であり、徹底した破戒であった。大徳寺の高僧であると同時に、巷を徘徊する無頼の徒でもあった彼の存在は、少なからず当時の宗教界に混乱を来したと思われる。

　晩年に至っては、盲目の巫女である森女と同棲し、彼女との濃厚な愛欲生活を『狂雲集』に赤裸々と謳い上げている。一休の行動には不可解なものが多いが、その一方で矛盾に満ちた一休のアンチコスモス的世界に、若き無名の芸術家たちが次々と群がり、そこから茶の湯、俳諧、能楽、水墨などの新しい芸術的潮流が誕生することになった。

　稀代の異僧・一休を題材としながら、宗教における「創造と破壊」のメカニズムを比較宗教学的見地から明らかにし、長きにわたって停滞気味である現代宗教界に一石を投じるような研究を推進したい。　（以上）

1. 齋木潤

今まで、瞑想の脳機能に焦点を当てて研究を進め、昨年度に瞑想の脳波測定を開始した。今年度はそれを継続するとともに、機能的脳イメージング研究の成果との連携を図る。

①瞑想の脳波測定研究の継続

瞑想時の脳波測定を行い、脳活動の時間特性に主として焦点を当てた解析を開始した。現状では、ヴィパサナ瞑想の経験を数十年持つ協力者１名と、1000－2000時間程度の経験を持つ中級者5名のデータを取得した。従来から報告のあるアルファ波のパワー、本研究で着目しているLRTCともに、すべての協力者に共通する傾向は見いだせておらず、瞑想時とレスト時の脳活動の差異には個人差が極めて大きいことが明らかになりつつある。今年度は、データをさらに追加するとともに、協力者に共通する傾向が見出せるか否か、別の指標も解析しながら探索的に解析を進めていく。特に、後述するように機能的脳イメージングデータとの連携が見込まれる電極間の活動の同期性等の解析を行う。

②瞑想の機能的脳イメージング研究（藤野氏）との連携

脳波測定は、時間特性の検討には優れるが、空間解像度に強い限界がある。一方、fMRIデータは空間解像度に優れるが、時間特性を見ることは困難である。藤野氏が行っているfMRI実験データの解析と連携して、瞑想の脳機能の時間特性と空間特性の双方を視野に入れた分析を行う。藤野氏の研究で焦点を当てているデフォルトモードネットワークの相関構造の変化に対応するような脳波データにおける変化を見出すことを一つの目標に設定する。

６、乾敏郎

H25年度は、催眠と瞑想の変性意識状態における神経科学的なプロセスモデルを考案した。特に催眠時において自己主体観の意識化に直接関与する部位への信号の抑制や物理的刺激の知覚部位ではなくそれに伴う感情を司る部位の抑制、また瞑想時におけるデフォルトモードネットワークにおけるマインドワンダリングを司る脳部位などが抑制されることを明らかにし、ネットワークモデルを提案した。H26年度は、比較的短期間でこのような抑制が起こる理由についてモデル化を進める。また神経回路網レベルでの催眠と瞑想の共通点と相違点を明確にする。さらに、乾(2012)の円滑なコミュニケーションに必要なシステムとしてlike-meシステム、 different-from-meシステムおよび予測と自己モニタリングシステムとの関連やdifferent-from-meシステムによって他者の心を読むという機能との関連について考察する。

７、鶴岡賀雄

最終年度ということもあり、西欧キリスト教を「身心変容」という観点から見直すという大目標を掲げる。言い換えれば、身心が「変容」することとして「救済」が考えられてきた系譜をさぐる。

そのための視点として、古代教父から近代カトリシズム神秘神学まで、さらにそれ以後のキリスト教周縁の諸領域まで、その信憑性の根拠を時代とともに変えつつ連綿と語られ、経験され、論じられてきた「霊的感覚」論に着目する。

扱う具体的題材をどうするかについては検討（逡巡）中なので固有名詞を挙げるのは控えさせていただくが－－アウグスティヌスとアビラのテレサは扱いたい――、宗教史上の諸理論、諸事例の検討を、現代哲学（および現代科学）の身心論に繋げて考えるという野望を抱いている。

（昨年度、論文を提出できず「負い目」があるので、敢えてめいっぱい大きな網を投げてみようとしております。大風呂敷を広げれば、小さくても珍しい獲物がかかってくれるかもしれない、という目論見です。）

８、河合俊雄

①心理療法におけるインターフェイスと身体

　心理療法は基本的に二者の関係として設計されているし、ことばによって心理的なものを扱うと考えられている。しかし心理療法が深まったり、あるいは困難な事例においては、二者の関係を超えるものが第三のものとしてコンステレートされたり、それが身体につながってきたりする。それを前年にも取り上げた「インターフェス」の概念を用いつつ検討したい。

　5月末の12th Conference for Journal of Analytical Psychology（Berlin）で、”Intersubjectivity, the third subject and open field in the analysis”として発表予定。

②心理学的差異としてのイニシエーションと身心変容

　心理学的差異は、ハイデガーの存在論差異から導入された概念で、人間の次元と魂の次元の差異を意味する。つまり心理療法においても、人間の悩みや幸福の次元もあれば、それを超えた次元も存在する。

　ユング派の心理療法は、まさに魂の次元をイメージによってある意味において実体的に扱おうとしてきた。しかし近年の心理療法においては、それは必ずしも実際にそれが生じるのではないけれども、実際の心理療法のレベルと区別されたものとして存在はしていることが大切ではないかと思われる。そのことを事例や現代の意識にもふれつつ、検討したい。

　これに関連して、7月にあるInternational Society for Psychology as Discipline of Interiorityでの基調講演を下記のタイトルで行うことになっている。

“Initiation and transcendence as substantiated goal or psychological difference: in reference to psychotherapy and Buddhism”

同一性と差異というなら、同じ現象について１は同一性から、２は差異から迫ろうというものです。

９、篠原資明

　21世紀になってからの自分の哲学的プログラムは、「ありなし間」から「いまかつて間」への転換を遂行するというに尽きます。ありなし間、すなわち、存在と無との対立、にもとづく哲学は、基本的に伝統的な思考スタイルと考えられますが、いまかつて間、すなわち、現在と過去とのあいだ、にもとづく哲学は、ベルクソン以降、断続的に試みられてきたものを、自分なりに捉え直した思考のあり方です。

　ありなし間の哲学は、ある意味でトマス・アクィナスにより行くところまで行った感があり、そのような観点からの見通しは、拙著『ベルクソン』（岩波新書、2006）の中で提示したとおりです。ところが近年は、京都学派、特に田辺元の哲学は、ありなし間のもう一つの極北を示すものではないかと考えつつあります。そこで、芸術と宗教と哲学との関係についての田辺元の考えを、ありなし間の立場として捉え直した上で、いまかつて間の立場から批判を加え、自分なりの考えを提示できればと思います。

　自分の分担テーマは、ありがたいことに、一つの軸として、自ら提唱し実践してきた「まぶさび」を割り当てられています。「まぶさび」は、知・行・遊の三密からなりますが、田辺元的にいえば、それら三密相互の関係は、哲学・宗教・芸術の関係に相当するようにも思われるのです。

　以上、目論見めいたものにすぎず、どれほど実現できるかわかりませんが、本年度の研究計画として提出する次第です。

１０、倉島哲

平成26年度は、昨年度までの大峯修験道調査を最終的に仕上げることに力を注ぐ。これまでの2度に渡る金峯山寺修行体験のフィールド調査で明らかになったのは、大峯修験道が他者に対する配慮の技法の習得を通した身心変容技法であるということであった。「六根清浄」の掛け念仏、隊列の編成、歩くペース、勤行、要所における講話など、修行者を取り巻く数多くの要因が、他者に対する配慮を促し、これを可能にする条件を作っているのである。

この成果を踏まえ、本年度は、大峯修験道の追加調査を行う。具体的には、5月から10月まで、およそ月に一度のペースで行われる金峯山寺修行体験に継続的に参加することで、修行者集団における調査者の位置の変化と、それにともなう修行の主観的・身体的経験の変化をたどる。

現在までの調査により、初回参加の新客が参加の回数を重ねるにつれ、異なった役目を課されることが観察された。たとえば、鎖場などの修行では、経験者が新客の荷物を運ぶことで、新客の修行をしやすくするのである。調査者みずからが新客から経験者への変化を経験することで、他者に対する配慮のありようの変化を主観の内部から記述できることが予想される。

経験者による新客に対する配慮は、新客どうしの水平方向の配慮とは区別して、「垂直方向の配慮」と呼ぶことが可能であるように思われる。これら二種類の配慮の相違を立体的に記述することで、昨年度までの調査では十分に踏み込めなかった、他者に対する配慮と、蔵王権現や仏陀などの超越的存在との関係について新たな知見が得られることが予測される。

１１、鎌田東二

①身心変容技法の全体像の位置づけ（マッピング）

②洞窟など、身心変容が起こりやすいヒエロファニー～ヌミノーゼ空間としての聖地と身心変容技法の展開との関係の考察とまとめ

③神楽や能や音楽など、トランス系芸能・芸術と身心変容技法との関係のまとめ

④武道・体術・身体表現と身心変容技法との関係のまとめ

⑤総括篇『身心変容技法研究第4号』の編集と単行本化に向けての交渉・具現化